

SHOBU STYLE

5066 Yoshino-cho Kagoshima city 892-0871,JAPAN

TEL:(+81)99-243-6639 FAX:(+81)99-243-7415 E MAIL:info@shobu.jp [URL:http://www.shobu.jp](http://www.shobu.jp)

Copyright (C) SHOBU STYLE All Rights Reserved.

第2回障害者文化芸術活動有識者推進会議

平成30年10月23日(火) 13:00～16:00

【資料】

社会福祉法人太陽会 SHOBU STYLE

しょうぶ学園

統括施設長 福森伸

## SHOBU STYLE

与えられる側から創り出す側へ

---

### 【しょうぶ学園創立】1973年

しょうぶ学園は1973年に開設。桜並木をくぐり抜けると、太陽会40年の歴史とともに大きく成長したセンダンやケヤキ、ヒマラヤ杉が芝の上に影をおとし、樹齢250年にもなるタブの大木が大きく手を広げるように人々を見守っている。私たちは木々に囲まれ、風や光や水が巡る心地よい循環のなかで暮らしたい。そして、創造的で刺激的なコミュニティーをつくるために、身近な自然環境に心を配り、幸福に生きていくための本質を守っていくことを大切に考えている。しょうぶ学園は、利用者の感性あふれる創作の姿勢に魅せられて、「与えられる」側から「創り出す」側になることを目標に1985年から活動そのものを「工房しょうぶ」と称して、従来の下請け的生産活動から、木工・陶芸・染め・織り・刺繍・和紙などのクラフト工芸活動を中心にした利用者の個性を發揮できる環境づくりに転換してきた。1995年頃から絵画、造形、刺繍、音楽などの芸術、表現活動が広がり、特別な能力のある人だけのものではなく、楽しくて、自由で、そのプロセスそのものが創造性の溢れるものとして、ジャンルにこだわらずさまざまな創作活動を通じて独自のものづくりを提案している。さらに、2006年のキャンパス改築に伴った環境整備を機に、「衣食住+コミュニケーション」を大きなテーマに、「ささえあうくらし-自立支援事業」「つくりだすくらし-文化創造事業」「つながりあうくらし-地域交流事業」の3つの事業を展開している。そして、子どものための施設作りに取り組むと同時に、障がいに関わり、様々な表現活動を支援するための劇場を備えた「しょうぶ芸術文化センター」は、「創造性と人間力」をテーマにした展開を模索している。

1973 しょうぶ学園創設（10年）教育、訓練

↓

1983 工房しょうぶ設立（10年）クラフト

↓

1993 芸術活動推進（10年）アート

↓

2003 衣食住+コミュニケーション（10年）

↓

2013 創造性と人間力（10年）

## [工房しょうぶのプログラム]

布の工房（染め織り、刺繍、バッグ）

木の工房（家具、器、オブジェ）

土の工房（食器、オブジェ）

和紙・造形の工房（絵画、和紙製品、Tシャツ）

園芸、養蜂（野菜、多肉植物、果樹）

食の工房（パスタ、そば、パンの工房とショップ）

## □プロジェクト

### 「nui project」1992年

ヌイ・プロジェクトは、[布の工房]から生まれた独創性に優れた刺繍プロジェクトとして、1990年より本格的に活動を開始。ひとりひとりの個人ワークを優先させ、「針一本で縫い続ける」という独自のスタイル＝行為から生まれてくる思いがけない表現、そのプロセスにおいて表出する心の動き＝心理や行動＝アクションのすべてを「その人の個性」として尊重し、芸術活動としてサポートすることを大切にしている。

### 「otto&orabu」2001年

otto(おっと)は、2001年に民族楽器を中心に結成したパーカッショングループ。足並みがそろわない頑強にずれる音、パワーのある音、弱い音、不規則な音。それぞれの人が違うから、その個性をイメージ素材としてアレンジアップして創る音は、純粹に楽しくセッションすることによって、心地よい不揃いの音として生まれて変わり、意外性のある新しいコラボレーションを目指している。また、ヴォイスグループ orabu(おらぶ＝鹿児島弁で「叫ぶ」の意)は、叫びのコーラス隊。ottoのリズムと orabu のヴォイスの絶妙のコラボレーション空間は、フリースタイルのパフォーマンスとして自己表現の意味を追求している。

## otto&orabu

### ----- CONCEPT -----

#### 共鳴する「不揃いな音」

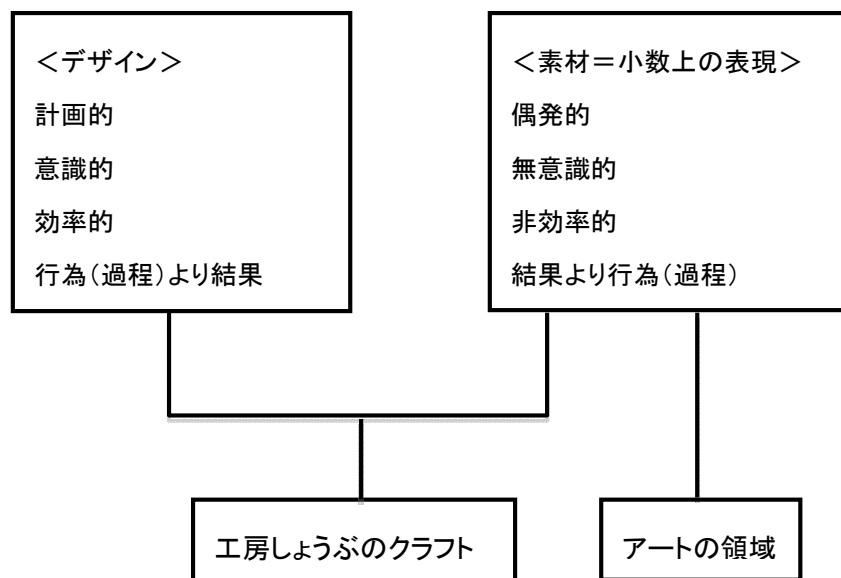
私たちは、日常的に沢山の音に囲まれている。音として認識できるのは、空気の振動が鼓膜を震わせて、その鼓膜の振動が脳内の特定の細胞を共振させた結果なのだ。音楽とは、人間が組織づけた音。音のもつ様々な性質を利用して、それを時間の流れの中で組み合わせて、感情や思想を音で表現することなのだが、複雑な振動なので共振する脳細胞も多岐にわたり、情感や記憶、イメージを司る細胞も「共鳴」させる。それらの多くは右脳にあって、更に脳の一番深いところにある本能の細胞も活動させるらしい。音楽を聞くと、その周波数に反応する聴き手の特定の脳細胞が「共鳴」する。音には感情が無いけれども、聴き手の楽しい感情の細胞がその音に反応すると楽しい音楽として認識される。しかし、人はそれぞれに、生まれ育った環境にある音、音楽、情景、出来事などが一人ひとり異なる記憶として潜在しているから、自分が意図しなくても音楽に対して右脳が自動的に反応するのだ。どの細胞が共鳴するかによって、同じ音を聞いても受止め方が変わってくる。だから、音楽の好き嫌いは人によって違うのだ。ある人にとっては、楽しい音楽であっても、同じものが、別の人にとっては、ただの騒音にしか聞こえない場合もある。逆に、心身が「共鳴」しているときは、パワーを上げても耳に痛い音にならず、聴き手の“本能に訴えかける音楽”が可能になり、言葉に表せない迫力を伝えることが出来るのである。

本来、音楽は上手な方がいいに決まっている。何かを表現したり、何かを伝えたりするには「不揃い」や「ズレ」は好ましいものではないはず。しかし、「はたして揃うことがすべて美しいことだろうか。上手とはいったいどういうことだろうか」と問いかけてみると、見えている世界には、実は見えていない別の可能性があることにも気づく。見方を変えれば、揃わない面白さは、それぞれの人の違いや中身の違いを個性や躍動として全面に押し出し刺激的に見せつけるところにある。逆に、揃えることが過剰になればなるほど人間らしさが失われていく。ottoの音の裏側には、演奏者の脳の内側の周波数が潜んでいる。人間らしい「不揃いの音」が観客の感覚と融合したとき、お互いがそこに魅せられ、感動し同調できる。この状態が私たちの目指している「共鳴」なのだ。彼らは、遊びながら、頑強に「ズレること」を守っているのかもしれない。

## [小数をデザインする] ~できることは小数上に隠れている

常に人々や社会が必要としているすべてのモノやコトのすべては、整数だけでなく無限の可能性は小数上にある日常の暮らしや人の習慣、文化そのものすべてが基本デザインの中にあるのである。通常、社会適応性や常識人の価値、デザインはここで言う「整数」でくくられている。基本デザインの枠を広げるといことは、一般的ではない彼らの価値観（本当にやりたいこと）の多くが存在している小数を観ることでもある。

「できる」の意味を拡げて、人間の本来の行為や本能まで掘り下げた上での小数点上にある「できる」を伸ばす。こんなポジティブな関係が良い。教えるとおもしろい小数が整数になってしまうのである。だから「教えない」のである。



工房しょうぶの共同作業によるクラフトや音楽は、考えをまとめたり一つにするのではなく、両者の制作に対する目的や意図するところの違いや特徴をマッチングさせて新しい創造物を作り出すものである。